

作物を 育てる、 人が育つ!

～タキイ園芸専門学校卒業生を訪ねて、
元校長が見た次代を担う若者たち～

第4回

おいしい軟弱野菜の 周年供給を目指して

兵庫県加古川市 **坂田耕祐さん**
(66回専攻科、平成25年3月卒業)

タキイ園芸専門学校 校長 **福嶋 雅明**

坂田耕祐君との出会い

今回訪問した坂田耕祐君は、親子二代のタキイ園芸専門学校の卒業生です。父・将さんは34回生、入社10年目で中堅社員になっていた私が、葉菜科の鬼軍曹として圃場で一緒に汗を流し、鍛えた生徒さんでした。お子さんの耕祐君は、私が校長として迎えた生徒です。彼の場合は専攻科進学や卒業後の進路相談を度々受けたことで印象が強く残っています。卒業して3年、2016年1月から独立して農業を始めた耕祐君を励ますとともに、軟弱野菜の匠・将さんにお会いし、農業経営の現状をお聞きする目的で取材訪問した次第です。

農業経営履歴書

軟弱野菜の周年栽培に取り組み、若手後継者の手本となるような魅力ある農業経営を目指しています。

坂田農園は耕祐君で四代目となります。初代・寅造さんは竹幌を使ってセ

ルリー、パセリを栽培し、神戸港のクイン・エリザベス号へ供給された新進気鋭の篤農家でした。二代・勉さんはサラダナ、キュウリのハウス栽培に取り組み、野菜生産に欠かせない良質な水を得るため、先代が掘削した井戸を150mまで掘り下げ、良質な六甲山の伏流水を確保し、安定生産に努めました。三代・将さんはタキイ園芸専門学校卒業後、兵庫県農業大学校に進学され、卒業後はトマト栽培に挑戦しました。就農10年目にトマト栽培から大都市近郊の立地条件を生かした軟弱

野菜(小ネギ、ミズナ、ホウレンソウ)の周年栽培へ転換、明石市場へ全量出荷される経営に切り替えました。経営規模はビニールハウス30a、露地80a、作付面積180a、労力は祖母・信子さん、将さん夫婦、耕祐君夫婦の5人です。

現在、四代目の耕祐君は「お客さん目線の野菜作り」をモットーに、1月から坂田農園の耕作地半分を譲り受け、ハウス5棟で小ネギ、シュンギク、ミズナ、赤紫ミズナ(紅法師)、カラシナ(コーラルリーフブルーム)、コマツナを作付け、露地20aでは、ズッキーニ、ニンジン(紫、黄色)、ホウレンソウ、小カブなど、多品目少量出荷を基本とした周年栽培の経営を始めたところです。

出荷先は消費者の顔が見える近隣の直売所「じいろふあくみん」、スーパ



↑兵庫県加古川市で直売所などを主戦場に、直販主体に軟弱野菜のほかズッキーニなどを経営に取り入れる坂田耕祐君。

への興味が湧き、農業に欠かせない植物の生理生態や安全・安心・おいしい野菜栽培技術の基礎を習得する目的で、父と同じタキイ園芸専門学校へ進学、本科・専攻科を経て平成25年3月に首席で卒業しました。卒業後直ちに両親のもとで専従者給与を受けながら、3年間にわたり父親のプロの野菜生産技術を習得しました。現在、2016年2月に結婚した恵梨奈さんと二人で



↑耕祐君の心強いパートナーの恵梨奈さんと。アウトドア派でスポーティーな彼女は、農業にもジャストマッチ。軽トラのハンドルを握ってガンガン出荷をこなす。



←かわいいポップ作成も恵梨奈さんの担当。



↑父の将さんは、筆者も感心する確かな技術でミズナ、青ネギなど栽培する。



↑新たな農業のスタイルを目指す坂田君の気持ちを受け止め話を聞く筆者。

一の地場野菜コーナーなど6〜8店舗が中心です。今年の売り上げ目標は一千万円ですが、すでに目標に近い成果が得られている様子で、初年度としては大成功といえそうです。

取材で感服したのが坂田農園の土壌です。初代と二代目さんによる豚糞堆肥・鶏糞施用に始まった4世代、70年にわたる土づくりの結果、土壌は肥沃で適度な保水力をもち、握ると固まり崩せば「さらり」として手に汚れが残りません。現在も二次発酵した牛糞粉殻堆肥を購入し、二度切り返した完熟堆肥をハウスに10a当たり春・秋に2・5t、露地に5t施用し、その上にソルゴーを栽培して繊維質を補給しています。

さらに感銘を受けたのが初代、二代と大型投資して完備した「井戸」の存在

です。農業は「種子」に命を吹き込む良質な「水」と発芽後スクスクと育つ「土壌」が必要です。栽培の基本となる土と水に心血を注いだ坂田農園四代の地道な努力に頭が下がりました。その成果は、夏場の長雨にもかかわらず父・将さんの見事な小ネギの畑や、耕祐君が初作付したファイトリッチシリーズの「紅法師」や「コーラルリーフブルー」の上々の作柄が証明しています。農家の財産は「土」と「水」という基本を再認識できました。

耕祐君の課題

父のもと3年間の修業で得たものは、農業のプロは職人的な神技を持っているのではなく、植物をよく観察し、やるべきことを科学的に的確に判断して行えば作物は立派に育ち、初心者が就

農しても立派に栽培できる農業技術を体得した自信です。

現在、独立して恵梨奈さんと二人で営農していますが、将来の雇用も視野に入れていきます。まずは売り上げを伸ばすことより、仕事と生活を明確に分けた合理的な農業経営を確立し、サラリーマン以上の年収を目指したい。農業は大変可能性のある職種と実感したので、毎日が充実して楽しいと現状を語ってくれました。

今後、挑戦したい品目は、レタスのサニー、ロメインや紫ニンジン、黄ニンジンなど収穫作業が容易で直売所で買い手の目を引く品目です。今や市場情報は簡単に携帯端末で入手できます。しかも消費者が減少する時代の対応として、少量多品目を周年にわたり継続出荷することが収益につながるのではないかと、農業マーケット・インに基づく生産・販売方式を少し転換することで新規需要が開拓でき、新規就農者でもチャンスは無限にあるのではないかと、熱く語ってくれました。ご先祖のすばらしい土と水の財産を維持・活用しながら、消費者ニーズに応えた付加価値を付けた生産物の周年安定供給が耕祐君の課題です。

取材を終えて

在学中は常に精神的な焦りが感じられた耕祐君が、就農して逆に落ち着きと余裕をもち、自信さえ漂う変化を見せてくれたことに驚きました。「経営を分けてから力が入り見違えるようだ」と父・将さんの談。「恵梨奈さんはよいう子でいつも仲よく一緒に働いている、自分ももっと頑張らなくては」と母・栄子さん。祖母・ご両親共々温かく二人を見守っておられました。

最後にそれぞれの学校生活に話題が移り、父・将さんは「夏の陣」馬ふん振り「うさぎ狩り」の思い出や、卒業後も全国の友人と物産会(野菜交換)を継続していることなど聞かせてくれたが、懐かしい生徒の名前が出るたびに思い出話に花が咲きました。耕祐君は在学時の思い出について、「農業法人から派遣された年長の友人は、やる気の度合いが違っていました。彼と常に実習で競争をするうち、自分も将来の目標が定まり俄然やる気が出てきたんです」と、切磋琢磨した友人たちが宝だと目を細めて懐かしんでいました。

大都市神戸に近い加古川市で、自分のスタイルを模索し軟弱野菜の周年栽培に挑戦する耕祐君と恵梨奈さんの若い二人の新農家が誕生したばかりです。今後とも皆さんの声援をお願い致します。

(平成28年11月2日)